

幼稚園児の食事作り担当者に関する質的研究

鈴木 道子・後藤 美代子・佐藤 玲子

A Qualitative Study on the Persons who Take Care of Kindergarten Children

Michiko Suzuki, Miyoko Goto, Reiko Sato

幼稚園児の食生活とその担当者に関する質問紙法による量的調査（2004年実施）を補完する目的で、宮城県内S幼稚園の保護者（全員母親）22名を対象に半構造化面接を実施した。22名は全員幼稚園児の食事作りを主として担っており、一部、夫や自身の母親、夫の母親が補助的役割を負っていた。食事作りの負担感は6名が「なし」、2名が「負担である」と回答したが、残り14名は状況によると回答していた。食事作りの負担感は結婚前からの料理経験の多寡、結婚後の学習機会、家族環境、体調その他の保護者自身の状況、子どもの健康その他の状況などにより影響されるものと思われた。保護者からは幼稚園児の食に関連して幼稚園に要望事項があり、幼稚園児及び保護者に向けたアプローチにより、適切な幼児の食生活の確保とともに食事作り担当者の負担軽減の可能性が示唆された。

キーワード：幼稚園児 保護者 食事作り 負担感 半構造化面接

緒 言

幼児期は、食に関する基本的しつけがなされ、生涯にわたる食習慣の基礎が確立する時期である。また、将来の生活習慣病予防の観点からもこの時期における食生活の重要性および食育の必要性が指摘され^{1)~3)}、幼児期から児童期の食生活に関しては特にその担い手である保護者特に母親の食意識との関連から、母親に対する食教育の重要性が強調されている^{4)~7)}。

筆者らは、幼児の健全な食生活の維持・確保とともに、その担い手の負担感軽減の方向性を探るための基礎資料を得る目的で、2004年2月から3月にかけて、宮城県内幼稚園13施設に在籍する幼稚園児の保護者1794名（うち有効回答者1269名）を対象に、質問紙（無記名式）法による調査を行い、幼稚園児の食事作りの担当者の実態およびその負担感

や関わりについて分析し、以下のような知見を得た⁸⁾。（1）幼稚園児の食に関しては、同居している母親のほとんどが食事作りを担当しており、幼稚園児のうち5人に4人は母親のみにより担われていた。（2）36.2%の保護者が食事作りに対しての負担感を訴えていた。（3）35.9%の保護者が幼稚園児の食に関して困っていることについて自由記述部分の記載があり、その内容は、幼稚園園児の食に関する問題（好き嫌い、食事の速度や量、食事態度など）に関するものが多かったが、一部保護者自身の問題についての記述がみられた。以上のことから、今後困難を抱えている幼稚園児の保護者に対して、食の担い手の拡充を含め、負担感の軽減を配慮した食教育を検討していく必要があると思われた。これらの結果は質問紙法という量的調査結果から得られたものであり、保護者の幼稚園児の食生活への関わりや保護者の負担感の実態、そ

の背景などについてより詳細に調査する必要を感じた。そのため、今回筆者らは、幼稚園児の保護者を対象とした面接調査を実施し、質的検討を行うこととした。

方 法

2005年9月から12月にかけて、宮城県内S幼稚園に在籍する幼児の保護者に幼児の食生活に関する面接調査を幼稚園責任者を通して依頼し、承諾の得られた22名の保護者に対して半構造化面接による調査を実施した。質問の手順やその内容についての事前の確定度により面接の構造化程度は決定するが、今回実施した半構造化面接では、質問手順、内容は事前に設定しているが、個別の面接の中で、特にその個人に固有と考えられる内容が話された際に、面接者はその内容についてより詳細に尋ねたり、場合によっては、対象者に自由に話してもらうという方法を取り入れた。あらかじめ設定した質問項目は表1に示すとおりである。面接に当たっては、調査目的、プライバシーの遵守、回答内容の自由の

保障を十分行い、文書による承諾書を得た。面接場所は、S幼稚園内部の一室を設定し、調査者はプライバシー保護の観点から環境を確認したのちに面接を実施した。面接に要した時間は30分から1時間30分であり、面接内容は筆記記録をとるとともに、ヴォイスレコーダーにて録音した。ヴォイスレコーダーの記録内容は筆記による記録の確認のために用い、確認後はその記録は消去することを調査協力者に約束した。面接内容は内容分析の手法を用いて分析した。なお、調査協力をいただいたS幼稚園は、2005年12月時点での在園児数97名、自然環境にも恵まれた中で、充実した人員を配置し、キリスト教主義の独自の教育理念に基づき運営を行い、畑作りや調理実習など食教育にも力を入れている幼稚園である。園児の昼食は家庭からの弁当持参であり、その点に関しては入園の時点で保護者は了解している。

結 果

1. 調査協力者のプロフィール及び幼稚園児の食事作りを担う程度

表2に今回の調査協力者のプロフィールを示す。22名全員が女性、年代は20代から40代（年齢は29歳から43歳）、幼稚園児との続柄は母親である。22名中2名が常勤の仕事をしており、5名が非常勤（在宅勤務を含む）、15名が無職であった。幼稚園児の食事作りは全員が担当し、内15名はほかの人の手伝いもなく、ひとりで担当している。残り7名のうち5名が夫（幼稚園児の父親）が手伝うことがあり、内1名は時々夫の母親が手伝う。また、1名はたまたま幼稚園児より年長の子どもが手伝い、1名は本人（調査協力者）の母親が手伝うという状況である。また、本人の病気などの危急時などは、惣菜購入やインスタント食品（カップ麺等）の利用で対応することが多い。

表 1 面接における質問項目

1	調査協力者のプロフィール ：調査協力者性別・同 年齢・職業の有無 幼児（幼稚園児）年齢・同 性別 家族構成
2	現在お子さん（幼稚園児）の食事作りを主に担っているのはどなたですか？
3	お子さん（幼稚園児）の食事作りは楽しいですか？それとも負担ですか？
4	どんなことに気をつけてお子さん（幼稚園児）の食事を作っていますか？
5	お子さん（幼稚園児）の食事に関するしついで特に気をつけていることがありますか？
6	もともと（結婚前から）料理作りは得意でしたか？
7	お子さん（幼稚園児）の食事（間食含む）に関して困っていることがありますか？
8	できれば、こんな風にお子さん（幼稚園児）の食事に関わりたくないという思いや希望がありますか？それはどのような条件が整えば可能でしょうか？
9	お子さん（幼稚園児）の健康に関して心配なことがありますか？
10	お子さん（幼稚園児）の食に関して要望したいことがありますか？

表2 調査協力者プロフィール

番号	性別	年代	職業	園児	続柄	家族関係
1	女性	30代	なし	4歳男	母親	夫婦と子ども2
2	女性	20代	なし	4歳男	母親	夫婦と子ども2
3	女性	40代	非常勤	4歳男	母親	夫婦と子ども1
4	女性	30代	なし	4歳女	母親	夫婦と子ども2
5	女性	30代	なし	5歳男	母親	夫婦と子ども2
6	女性	30代	なし	5歳男	母親	夫婦と子ども2
7	女性	30代	なし	5歳男	母親	夫婦と子ども2
8	女性	40代	なし	5歳男	母親	夫婦と子ども2
9	女性	30代	なし	5歳男	母親	夫婦と子ども2
10	女性	30代	なし	5歳女	母親	夫婦と子ども4、父方祖父
11	女性	40代	なし	5歳女	母親	夫婦と子ども3
12	女性	30代	常勤	5歳女	母親	母親と子ども1
13	女性	30代	なし	5歳女	母親	夫婦と子ども2、父方祖父母
14	女性	30代	非常勤	5歳女	母親	夫婦と子ども3
15	女性	30代	なし	5歳女	母親	夫婦と子ども2
16	女性	30代	なし	6歳男	母親	夫婦と子ども2
17	女性	40代	非常勤	6歳男	母親	夫婦と子ども2
18	女性	30代	なし	6歳男	母親	夫婦と子ども2
19	女性	30代	常勤	6歳男	母親	夫婦と子ども2
20	女性	40代	非常勤	6歳女	母親	夫婦と子ども2
21	女性	30代	非常勤	6歳女	母親	夫婦と子ども2
22	女性	40代	なし	6歳女	母親	夫婦と子ども2

2. 幼稚園児の食事作りに対する負担感と結婚前の料理経験その他の要因

幼稚園児の食事作りについて躊躇なく「楽しい」もしくは「負担ではない」と回答した人は6名、また「負担である」と回答した人は2名であった。残り14名は「状況によっては楽しいが、負担な時もある」と回答した。「状況による」の具体的内容は「自分に余裕があるときは楽しい」「(母親自身が)日中出かけて疲れたときなどは負担」というように母親の体調・疲労の程度による場合と、「みんながおいしいと言ってくると楽しい」「好き嫌いがあって食べてくれないときは負担」のように子どもの食事に対する反応による場合があった。

結婚前からの料理の得手不得手の質問に対しては、その経験の多寡が語られることが多かった。結婚前からよく料理をしていた人は22名中11名、残り11名はほとんど料理を経験せず、結婚後料理を始めた人たちである。

上記、幼稚園児の食事作りの負担感を「負担感なし」「状況による」「負担感あり」群に分け、その3群と、結婚前からの料理経験を

「豊富」「少ない」の2群とをクロスさせた結果を表3に示す。料理作りの「負担感がない」と回答した6名中4名は結婚前の料理経験が豊富であった。また、「負担感がある」と回答した2名はいずれも結婚前の料理経験は少ないと回答していた。負担感の有無は「状況による」とした14名中、結婚前の料理経験が豊富であった人7名、経験が少なかった人7名と同数であった。表3に示すようなグループ分けをして、さらにその内容を検討した。

表3 「幼稚園児の食事作りに対する負担感」と結婚前の料理経験の多寡

幼稚園児の食事作りに対する負担感	結婚前の料理経験	人数 (調査協力者番号)	グループ名
ない	豊富	4名：12・16・17・22	A
	少ない	2名：2・10	B
状況による	豊富	7名：1・6・7・9・11・14・18	C
	少ない	7名：4・5・13・15・19・20・21	D
ある	豊富	0名	—
	少ない	2名：3・8	E

表 4 グループ別にみた調査協力者の生活背景

グループ	番号	生活背景 (特記事項)
A	12	結婚前は一人暮らしで自炊していた。子どもは身体的障がいおよび便秘症状があり、食事には配慮を必要とする。常勤職。近所に自身の両親が住み、母親に食事作り等援助してもらっている。
	16	自身の母親が仕事をしており結婚前から自然に料理をしていた。栄養士免許あり。食事作りに子どもも参加し楽しい。
	17	自身の母親が仕事をしており当り前のものとして家事を分担。学生時代から料理教室に通う。料理作りが好き。
	22	結婚前は一人暮らしで自炊をしていた。料理作りは好き。子どもが料理に希望を出してこることもあり楽しい。
B	2	料理好きの母親の味は覚えている。結婚後本などを見て料理は覚え、圧力鍋等を利用。子どもが好き嫌いなく食べる。
	10	結婚前は一人暮らしをしていたが自炊はほとんどしなかった。結婚後飲食関係の仕事をしていた夫から料理を習う。
C	1	結婚前は一人暮らしで自炊していた。子どもの反応によって、食事作りは楽しい時もあり負担のこともある。
	6	結婚前から料理好きで、栄養士免許あり。菓子やパン作りは楽しいが、子どもの好き嫌いで負担に感じることもある。
	7	結婚前から料理好きで、栄養士免許あり。一人暮らしで自炊。子どもの反応次第で楽しい時も負担に感じる時もある。
	9	結婚前は実家にいたが料理は好きでよくしていた。食材の宅配を週3～4回頼んでいる。手抜きはしたくない。
	11	結婚前は実家にいたが料理は好きでよくしていた。子どもの好き嫌いがあり、反応次第で楽しい時も負担の時もある。
	14	結婚前は一人暮らしで自炊していた。行事食などは自身の精神状態や体力によって、楽しい時も負担の時もある。
D	18	結婚前は一人暮らしで自炊していた。専業主婦として3食きちんと作らなくてはと思ったり、体調が悪い時は負担。
	4	料理は好きではなく、実家にいてもほとんど作らず、専業主婦になって始めた。子どもの反応により左右される。
	5	結婚前は実家において料理はほとんどしていない。結婚後本などで覚えた。自身が疲れている時は負担。
	13	結婚前は一人暮らしだったが自炊はほとんどしなかった。子どもの反応に左右される。3世代同居で食事作りは大変。
	15	料理は好きではなく、一人暮らしをしていたがあまり自炊はしなかった。結婚後本などで覚えた。子どもがアレルギーのため卵類は控えている。
	19	結婚前は実家において料理はほとんどしていない。常勤職。時間に余裕がある時は楽しいが、普段は余裕がない。
	20	結婚前は実家において料理は全くしなかった。自宅で仕事をしており、忙しい時は義務的な料理作りとなる。
21	結婚前は実家において料理はあまりしなかった。子どもと一緒に台所に立てるようになり孤独感はなくなった。	
E	3	結婚前は実家において料理はしなかった。子どもに好き嫌いがあり、メニューを考えるだけでも大変。
	8	一人暮らしをしていたがほとんど料理はしていない。食事作りそのものが負担。

表4にグループ別にみた調査協力者背景の特記事項を示す。Aでは、結婚前から料理の経験が豊富であり、現在も食事作りに負担を感じていないグループである。常勤職も持ち、身体的障がいを抱える幼児の養育をしている人も含まれているが、近くに住む両親が協力的であることが負担感を感じさせない大きな要因として挙げられている。Bでは、結婚前からの料理経験は少ないが、現在は食事作りに負担を感じていないグループである。1名は料理経験は少ないものの、料理好きであった母親の味は覚えており、結婚後に本などで勉強しながら、料理を覚えていた。もう1名は結婚前までは料理経験はほとんどなかったが、結婚後飲食関係の仕事をしていた夫に料理を覚えてもらうという経験を経ている。C及びDは、状況によって負担を感じる時もあるというグループであり、「状況」の内容

としては同居家族の要因、仕事との関係(多忙・疲労・時間の制約など)、子どもの反応などが挙げられていた。グループEは、結婚前の料理の経験は乏しく、現在食事づくりに負担を感じているグループである。1名は子どもの好き嫌いを挙げていたが、もう1名は食事作りそのものが負担であると回答していた。

3. 幼稚園児の食事に関連した留意点及びしつけについて

食事に関する留意点としては、「栄養のバランス」をあげている人が22名中19名、「カロリー」が2名、「食材」(新鮮さと安全、減農薬野菜など)が4名、その他、添加物に注意している、インスタントやレトルト食品を使わない、嫌いなもの(野菜など)を食べさせる工夫などをあげており、ほとんどの保護者が幼稚園児の食事には関心を持って留意し

ていた。1名のみ「好き嫌いがないのでバランスよく食べているから、特に気をつけていることはない」と回答した。

食事に関連したしつけについては、全員が、食に関するしつけを行っているとは回答していた。内容的には、食前の手洗い、食前後の挨拶、箸の持ち方、食事のマナー（立ち歩かない、姿勢、テレビを見ないなど）、食事の準備・後片付けの手伝いなどである。

4. 幼稚園児の食事に関して困っていること

22名中6名は「特に困っていることはない」と回答していた。「困っていること」としては「好き嫌い」「間食関連（量の加減ができない、市販菓子が多、友人宅で多く食べてくるなど）」「小食」「食べすぎ」などの問題があがっていた。

5. 幼稚園児の食事に関わる希望

幼稚園児の食事に関しては、「家族揃って食べたい」を希望としてあげた人が22名中11名存在した。阻害要因としては夫（父親）の仕事時間の関係が最も多く、「そのことはどうにもならないが、週末、休日などは一緒に食べるようにする」ことで、解決の糸口を見出している人が多かった。次いで、手作りのおやつを作って食べさせたい、子どもと一緒におやつを作りたい、見た目のかわいい弁当を作ってあげたい、料理のレパートリーを増やしたいなどがあげられていた。いずれも、そうしたい（若しくは「そうしなくては」）と思いつつ、時間的若しくは精神的余裕がなく現実にはできていないと回答していた。

6. 幼稚園児の健康状態

幼稚園児の健康状態については、身体的障がいがあり便秘傾向のある幼稚園児が1名、食事制限なしのアトピー性皮膚炎傾向児1名、卵を控えめにしているアレルギー傾向児1名であった。

7. 幼稚園に対する要望

給食導入に関しては、積極的及び消極的賛成は22名中11名、同反対も11名であった。その内訳と理由を表5に示す。なお、積極的賛成に関しても給食に導入は毎日ではなく週1～2回程度の希望が多かった。また、消極的反対であっても一緒に食事をとる機会を持つことは賛成しているケースもあった。

幼児向けの料理講習会については9名から希望があった。

表5 給食導入に対する調査協力者の意見

給食導入に対する意見	人数	理由
積極的賛成	9名	①保護者の負担軽減 ②子どもに対する教育的意味（好き嫌いをなくすなど）
消極的賛成	2名	子どもに対する教育的意味
消極的反対	9名	①弁当作りは負担ではない ②子どもに対する栄養的・教育的意味・親子の関わり
積極的反対	2名	①「同じものを食べなさい」といわれるのはいや ②経済的負担

表6に、グループ別にみた、給食導入に対する意見及び幼児向け料理講習会希望者の人数を示した。一定の傾向は見られなかった。

その他、調査協力者からは「食育に関する話を聞きたい」という声や昼食時に供される飲み物についての要望などがあった。

表6 グループ別給食導入に対する意見及び料理講習会の希望

グループ名	給食導入に対する意見	人数	料理講習会希望
A	賛成	2	1
	反対	2	
B	賛成	1	1
	反対	1	
C	賛成	5	3
	反対	2	
D	賛成	2	3
	反対	5	
E	賛成	1	1
	反対	1	

註：「賛成」には積極的賛成と消極的賛成を、「反対」には消極的反対と積極的反対を含む。

考 察

今回調査協力をいただいたS幼稚園は独自の理念をもち、園児の昼食は持参弁当であり、食教育に力を入れている。保護者参加の行事も多く、保護者の時間的及び経済的負担は大きい。その意味で時間的・経済的に恵まれた保護者が多く、宮城県内の「平均的」幼稚園であるとは言えないかもしれない。さらに、面接調査を承諾された保護者は特に子どもの養育に熱心である可能性が高く、S幼稚園の中でも「平均的」な保護者像を反映しているとは言えないかもしれない。S幼稚園及び調査協力者の特殊性に関係する限界やバイアスを踏まえつつ、現代の幼稚園児の食事の担い手の課題について考えていきたい。

子どもの食事作りに関しては、母親がその主たる担当者であることが既定の事実として扱われ、母親の食行動や食意識などが子どもの食行動等に大きな影響を与えるとの多くの報告がなされている^{4)~7)}。実際、幼稚園児の食事の担い手に関する筆者らの調査でも、母親が圧倒的にその役割を担っており、次いで父親、母方祖母、父方祖母が担っていることがわかった⁸⁾。今回の調査協力者は全員母親であり、幼稚園児の食事の担い手の中心であった。一部、父親、母方祖母、父方祖母が担っており、量的な比較はできないが、食事作りの担い手の実態としては、量的調査と矛盾しない結果であった。また、質問紙法による量的調査では、幼稚園児の食事に関して母方祖母が同居していないにもかかわらず、幼児の食事の担い手として一定の役割を果たしているとの知見を得たが⁸⁾、今回も22名中1名にその形態が見られた。

質問紙による量的調査では、幼稚園児の食事の担い手の36.3%が「食事作りは大変」と回答していた⁸⁾。が、その実態については

明らかにすることができなかった。今回の調査では22名という少数であるので、量的に明らかにすることはできないが、食事の担い手の生の声を聞くことができた。「食事作りが大変」か否かという2者択一の質問紙による質問に対してはおよそ3人に一人が「大変」と回答していたが、個別に面接調査を行うことにより、単純に「大変」か否かと割り切れるものではないことが分かった。22名中、6名は「負担感はない」、2名は「負担感がある」と回答していたが、残り14名は「状況による」と回答していた。質問紙法ではその時点の判断で回答されるが、面接法ではその時点を含めより詳細にその状態を聞き取ることが可能である。幼稚園児の食事作りの多くを担う母親としては、状況により、負担と感じる時も楽しいと感じる時もあるというのが実態に近いと思われる。では、その食事作りを担当する際の負担感はどのような要因によって左右されるのだろうか。結婚前の料理経験の多寡で調査協力者を分類した場合、経験豊富な人が11名、経験が少ない人が11名と同数であったにもかかわらず、「負担感がある」と回答した2名は、いずれも経験が少ないグループに属していたこと、また、「負担感はない」と回答した6名のうち4名は経験豊富なグループに属していたことから、何らかの形で結婚前の料理経験というのは「負担感」形成の要素になりうるのではないかと考える。食事作りと結婚前の料理経験をクロスさせたグループで検討してみると、負担感については、それ以外に結婚後の家族環境、自身の多忙や疲労、職業の有無、食事作りを手伝ってくれる人の存在、子どもの状況などが関係しているものと思われる。今回の面接調査から考えられる幼稚園児の食事の負担感形成要素を表7に列記する。興味深いことは、いくつかの不利な条件が重なっていても他の条件がそれを凌駕

表7 幼稚園児の食事作りの負担感形成に関係する要因

1. 結婚前の料理体験
2. 結婚後料理を学ぶ機会
3. 結婚後の家族環境：夫・同居親・近居親などの理解や協力
4. 自身の体調・疲労
5. 職業：有無、労働時間・労働環境など
6. 子どもの状況 ：健康状態・好き嫌いの有無・摂取量の多寡・「おいしい」などの反応の有無

することができれば負担感を軽減することができると思われることである。子どもの健康上の問題や職業上の多忙が存在していても協力的な家族の存在がある、あるいは、結婚前の経験が乏しくとも結婚後学ぶことができる機会が提供されれば、その負担感は大きくないなどのケースがそのことを示唆しているものと思われる。もちろん、「負担感」はあくまでも主観であるので、その人の性格、感受性なども、結婚前の経験や結婚後の環境と複合的に関連しあって形成されると思われる。

今回の調査では、ほとんど全ての調査協力が、幼稚園児の食事作りに際しては、栄養その他多くの事柄に対して配慮し、食に対するしつけを実施していた。そのことは量的調査とも矛盾しない結果である。

幼稚園児の食事作りをほとんど一人で担っている母親に対してその負担感を軽減していく方法はあるのだろうか。まず、幼稚園への要望という点から考えてみたい。S幼稚園では昼食は持参弁当であり、給食導入することにより負担感軽減を図れるのではないかと考えられるが、今回の調査では賛成と反対が50%ずつであり、賛成の場合も週1～2回の要望が多かった。入園の際の幼稚園選択の時点で、弁当持参を了解していることから、それなりの覚悟を持って弁当作りを始めた結果、当初負担感をもって始めた弁当作りであっても、母親自身が料理のスキルアップを果

たしたり、幼稚園児からの反応がやりがいに繋がった可能性がある。また、幼児向けの料理講習会の開催については22名中9名にみられ、幼稚園が食に関わることを期待されていることを伺わせる。給食導入や講習会希望者を、結婚前の料理経験と負担感でクロスさせた前述のグループごとに見た結果では、一定の傾向は見られなかった。

母親が食事作りを担当する際の負担感形成の一因として幼稚園児の状況があると考えられるが、表7にその要素をあげたが、幼稚園の「食育」を通して好き嫌いをなくすことや「おいしい」という反応を惹起することは可能であると思われる。

適切な成長と将来の生活習慣予防などの観点からの幼児期の望ましい食事の確保とともに食事作りの担当者の負担軽減は、幼児の食生活を考える上で重要な課題である。両者の両立は、もちろん、幼児およびその保護者（特に母親）に対するアプローチのみで解決のつく問題ではない。しかしながら、幼稚園における園児や保護者に対する働きかけは、その両立に向けた一助になるのではないだろうか。小学校、中学校と進むにつれ、子どもの食習慣は固定していく傾向にあり、また、保護者と学校との関わりも希薄になってくる。子どもの食習慣形成の時期であり、保護者とのかかわりも密な幼稚園時代は食育の好機であると考えられる。

謝 辞

ご多忙のところ、本調査にご協力くださいましたS幼稚園の保護者のみなさま、園長初め教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 坂本元子編：子どもの栄養・食教育ガイド，医歯薬出版，p 14 (2001)，東京
- 2) 藤原良知：子どもの心と体を育てる食事学，第一出版，p 16 (2002)，東京
- 3) 中原澄男：乳幼児の栄養と食生活指導，第一出版，p 140 (2000)，東京
- 4) 山口静枝，春木敏，原田昭子：母親の食行動パターンと幼児の食教育との関連，栄養学雑誌54(2)，87-96 (1996)
- 5) 富岡文枝：幼児への食教育と両親の食意識及び食行動との関わり，栄養学雑誌，57(1)，25-36 (1999)
- 6) 富岡文枝：母親の食意識および態度が子どもの食行動に与える影響，栄養学雑誌，56(1)，19-32 (1998)
- 7) 伊藤至乃，天野幸子，殿塚婦美子：食生活における母子の関わりについての研究，栄養学雑誌，51(1)，39-52 (1993)
- 8) 後藤美代子，鈴木道子，佐藤玲子，鎌田久仁子，阿部由希：幼稚園児の食事の担い手の実態，栄養学雑誌，64(6)，325-329 (2006)